

## 第51回日本輸血学会総会

小堀正雄\*

平成15年5月29日～31日の3日間、北九州国際会議場およびリーガロイヤルホテル小倉で第51回日本輸血学会総会が産業医科大学輸血部坂本久浩総会長のもと開催された。本学会開催期間はなんと第50回日本麻酔科学会と完全に一致するため、麻酔科医はだれも居ないだろうと思ったらそのとおりであった。小生は学会前日に自己血推進委員会が予定されていたため出席を余儀なくされていた。発表会場は5会場でシンポジウム、研究調査報告、記念賞受賞講演などが中心であった。一般演題は222題で全てポスター展示とし、そのうち84題がシンポジウムで取り上げていないテーマということで一般口演にもなった。つまり、ポスターとスライドという2倍の手間がかかるわけである。残りは、ポスター展示だけで発表の機会が全くなく、ただ展示および質問票があり後日質問者に個別対応するシステムになっていた。当然、気楽だ。質問票にはほとんど書き込まれていなかった。本学会では従来から一般演題についての発表形式には混乱が見られる。本学会の主なテーマのひとつに「輸血部門と臨床各科との連携を目指して」があり、「～における輸血の適応と選択」というシンポジウムが多くあった。これには、「整形外科手術」、「消化器（食道・肝胆膵）外科」、「肝臓移植」、「心臓血管外科手術（これは東日本と西日本に分けてシンポが2題）」、「産婦人科領域」、「新生児輸血」、「救急部・集中治療部」、「泌尿器科手術」と多岐にわたり、輸血に興味がある小生にとっては垂涎のシンポジウムであった。手術症例に対して輸血部関係者だけでなく各科の演者を中心に活発な討論があった。輸血関係者の最も知

りたいことは手術室での輸血使用状況であることが納得でき、この場に麻酔科医がもっと参加すべきであると確信した。また、もう落ち着いたと思っていた院内採血輸血（自己血でなくいわゆる生血を指す）問題がまだあり、特に西日本で盛んに行われていることには驚かされた。自己血も一時の隆盛がなくなり、今後どのような意味付けをするのか討論があり、安全性を高めるには必要であるものの過剰採血は破棄血を増やすことにもなりかねず慎重な選択が求められた。しかし、天皇陛下が貯血式自己血輸血をお受けになられたことから、今後患者サイドからの要求が増えることも予想された。もう一つの本学会のテーマは「血液の国内自給と安全な輸血療法への取り組み」であった。循環制御医学会会員の多くは今、少子高齢化によりここ2～3年以内に手術用血液の不足が生じ、約20年後には必要量の2/3程度しか確保されない見通しにあることを知っているだろうか。献血と適性輸血推進のための薬事法改正、いわゆる血液新法が本年7月から施行される。学会最終日には「安全な血液製剤の安定供給の確保等に関する法律について」の公開特別講演が坂口厚生労働大臣によって行われる予定である。輸血は多くの臨床医にとって関心を引かないかもしれないが、この学会に出席して改めて臨床ばかりでない行政も含めた観点で診療に臨むことの大切さが痛感された。小生は、季節外れの台風が九州に近づいていることや麻酔科学会などのこともあり、公開特別講演を聞くことなく学会2日目の夕刻失礼した。

\*昭和大学藤が丘病院麻酔科